

## 「病」と「病氣治し」からみる新宗教と代替療法

武井 順介

### はじめに——本研究の目的

本稿は、「癒し」の対象として捉えられる傾向にある代替療法を「病」や「病氣治し」の対象として捉えることによって、新宗教の「病」や「病氣治し」との比較を試みることを目的としている。では、なぜ対象を読み替えてまでも新宗教と代替療法を比較する必要があるのか。それは両者ともに近代医療（西洋医療）とは異なる方法で「病」の「回復」を行なおうとする実践をもつためである。その類似性から新宗教における「病氣治し」のメカニズムを考える際の示唆を与えてくれるのではないかと考える。

新宗教における「病氣治し」の実践も代替療法におけるそれと同様に近代医療とは異なる方法で「病」を「回復」させる点では、類似であるといえよう。しかし、新宗教は「病氣治し」として、代替療法は「癒し」として捉えられているようにみえる。たとえば、岡田式静座法（小堀 1999）、野口整体（前川 1999）、森田療法（近藤・北西 1999、島藺 2003）、マクロビオティック（島藺 1999; 2003）、ヨガ（伊藤 2006）などは、「癒し」といったカテゴリに分類され、研究される傾向にある。また、新宗教信者の心理的側面に着目した研究でも「癒し」といった表現がみられる（杉山 2004）。

もし「癒し」が、安心感や精神的・心理的なこととして捉えているならば、新

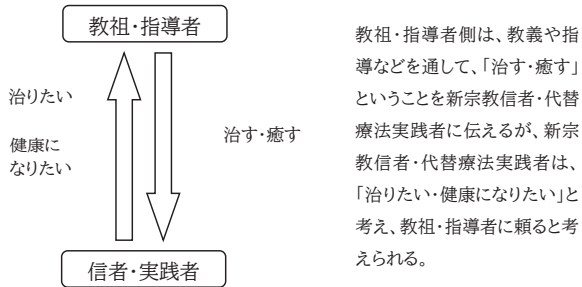


図1 立場からみる病気治しと癒しの相違

宗教の信者（以下、新宗教信者）や代替療法を実践している人たち（以下、代替療法実践者）をみると、この「癒し」という言葉では解消しきれない課題があることに気づく。それは、当事者（＝新宗教信者と代替療法実践者）は、決して「癒されたい」と思っているわけではなく、「治りたい」「健康になりたい」と思っているのである（図1）。

そこで本稿では、当事者の視点に重点をおき新宗教と代替療法の実践を「病」や「病気治し」としてみることをとおして、両者を比較し、類似点と相違点を考えたい。その際、着目するのは当事者の「病」に関する「語りの形式」である。

## 1. 「癒し」として対象化された代替療法

上述したように代替療法は「癒し」として研究の対象にされてきた。本章では、このように対象化した（された）研究について概観することを通して、なぜ（あるいはどのように）「癒し」として対象化した（された）のかについて整理したい。

まず田邊信太郎、島藺進、弓山達也（1999）は『癒しを生きた人々—近代知のオルタナティブ』（以下、『人々』と略記）において、岡田式静坐法、鎮魂帰神、森田療法、マクロビオティック、野口整体をとおして、「現代の〈癒し〉の源流な

いしは先行形態と考えられる明治後期から昭和前期の思想と実践」(田邊・島菌・弓山 1999: はしがき)について明らかにしている。この〈癒し〉に関わる思想とその実践とは、

広義の代替知(オルタナティブな知)に基づくものである。すなわち、正統的な近代知に属していないか、近代知を基盤としていても、必ずしもそれだけにとらわれなかった実践(田邊・島菌・弓山 1999: 3)

のことである。これは、正統的な近代知としての「現代医学や健康科学が供給源となるもの」(田邊・島菌・弓山 1999: 8)や「科学の知見に象徴される合理主義的な」(田邊・島菌・弓山 1999: 8)ものとは異なる代替知を対象化している。この代替知は以下の6点として整理されている。

- ①我が国の歴史の中で発展してきたり、主に中国やインドから今日までもたらされてきているいわゆる東洋医学等、相当に歴史性と社会的規模をもつ伝統医療や伝統的健康論が供給源となるもの。
- ②歴史ないし社会的規模は伝統知よりも限られたものであるが、ある地域や家庭、ないし当該地域の特殊な技能保持者により実践されてきたいわゆる民間療法が供給源となるもの。
- ③歴史的には保健医療とのかかわりが深かったものの、近代ではそういう役割を公的には認められなくなった宗教が供給源となるもの。
- ④近代以降に我が国へ導入されて展開されてきたカイロプラクティックやオステオパシー、類似の手技療法、光線や温熱等の機器を使用した療法、催眠術や気合術等の影響を受けた各種の民間精神療法等。
- ⑤欧米や日本のような先進国の一部で新たに展開されつつあるホリスティック医学や統合医学のような、近代医学と非近代医学の総合や統合への志向

をもった理念と実践。

- ⑥その他、マスメディアから発信されるいまだ評価不明の療法や健康法、個人的体験レベルの療法等、判断を留保せざるをえないもの。

(田邊・島菌・弓山 1999: 8-11)

では、なぜこのような「代替知」を対象化しているのだろうか。それは、代替知の中には、詐欺的療法やプラシーボ効果もある(田邊・島菌・弓山 1999: 40-41)としながらも、

一定の歴史と支持を有してきた代替療法があることも事実である。困難ではあるが、玉と石とを分けながら、今後とも生に根ざした癒しの知の本質に迫り、今日的意義を探りたい(田邊・島菌・弓山 1999: 41)

と記されていることからわかるように、代替知の本質に迫り、今日的意義を探るためといえよう。

一方、島菌進(2003)は、『〈癒す知〉の系譜—科学と宗教のはざま』(以下、『癒す知』と略記)において、主に食養、マクロビオティック、森田療法をとおして、そこにある(あるいはそれをとおして知ることのできる)〈癒す知〉について明らかにしている。この〈癒す知〉について島菌は、

からだ(身体)や心に関わる知、また、からだや心に関わるものとしての自然と社会についての知である。からだや心が痛みや苦しみから解放され、より健やかで本来の豊かな可能性を発揮できる状態へと回復するための知である。だが、それは正統的な近代科学では実現できなかったものを目指す。学校で教えられ、病院で実行に移される近代医学や生物学、生理学、あるいは農学などの主要な「近代知」に対する「代替知」(alternative knowledge)とし

ての自覚をもっている。(島藺 2003: 11)

と述べている。つまり、ここで対象化されている〈癒す知〉とは、「正当な近代科学」とは異なり、さらに「病院で実行に移される近代医学」とは異なる「代替知」であることがわかる。では、この〈癒す知〉をどのように対象化しているのだろうか。

科学的に証明されなかったり、医師の目から見れば明らかに間違いであるような癒しの知や技法を、人々は尊んできた。いかがわしい代替医療、「迷信」かと疑われる民間療法によって寿命を縮めた人はたくさんいるかもしれない。だが、そのことはそれらの「いかがわしい」知や技法が、文化や歴史の中で無視してよいものであることを意味しない。…科学と同様の基準でとらえ、実際の妥当性有効性をその価値の基準とするのでは足りない。正統的専門家の知と同じ土俵でとらえてもその価値は十分に明らかにはならない。それらはむしろ正統文化、主流文化に何が欠けているか、そこでは何がゆがんでいるのかを照らし出す異種の光源のようなものとして見た方がよいこともある。(島藺 2003: 31)。

上記からわかるのは、島藺は、代替療法の「知」を対象化し、そこから「正統文化、主流文化」のある種「欠陥」を明らかにしたい、ということであろう。

上述のように、『人々』も『癒す知』も主に代替療法を対象にしつつも、そこではその代替療法実践者(あるいは代替療法実践者自身の「病」に対する意味付け)を対象にするのではなく、歴史的、知識的な側面から明らかにしているといえる。そのため、代替療法実践者がその代替療法をとおして「どうなりたいのか」については、対象外であり、当然、明らかにされていない。そこで、次章より、この「どうなりたいのか」を語りの中に見出すことができる「語りの形式」とそこ

にみられる「病」や「病気治し」に関する意味付けを分析することをとおして明らかにしたい。尚、比較対象の新宗教信者に関しては拙稿（武井 2009）で用いた事例を一部掲載するに留めたい。

## 2. 「語りの形式」と「病」からみる新宗教

さて、本稿で着目するのが、当事者の「病」や「病気治し」に関する「語りの形式」であることは上述した。ではこの「語りの形式」とは何か。それは拙稿（武井 2009）において、明らかにしたことである。

拙稿（武井 2009）において明らかにした「語りの形式」は、世界救世教いづのめ教団（以下、世界救世教と略記）のものである。そこでは、2003年から2007年までの世界救世教の機関紙『光明』<sup>1)</sup>に掲載されている体験談170話を分析した<sup>2)</sup>。その体験談で語られている内容の具体的な事柄の記述を削除（捨象）し、要素（トピック）を取り出し、それを体験談の展開（あるいは時系列）の順番に並び替えたものが、「語りの形式」である。例えば以下の体験談からは、「病—近代医療—回復せず—浄霊—回復」といった「語りの形式」を抽出できる<sup>3)</sup>。

自営の酒屋を切り盛りし、若いころから腰に負担をかけていた私は、20年前、交通事故で腰を強打して以来、深刻な腰痛に悩まされていました。さらに4年ほど前には、ひどい頭痛に襲われるようになり、痛みで何もする気にならず、外出もできなくなりました。家族の誘いにも応じることができず、幾度も断っては、皆が出かけている姿をいつも1人寂しく見送っていました。

息の詰まる生活から抜け出したいとの思いから、私は治療に躍起になっていました。

マッサージ・チェアや高価な健康食品の購入をはじめ、温泉療法のため

に地方へ宿泊したり、よいと言われる方法は可能な限り試しました。指圧治療と病院通いも日課になり、いつのまにか多額のお金を費やしていました。痛みが出ると、すぐに薬を飲みましたが、効果は一時的で、その後も痛みは増すばかりでした。私は、“これ以上どうすればいいのか”と強い絶望感を感じ、心の晴れる日は1日としてありませんでした。

昨年3月、友人のSさんが心配して、「浄霊を受けてみませんか」と声をかけてくださいました。私は、“手をかざすだけで治るわけがない”と半信半疑でしたが、他に頼るものもなく、浄霊を受けることにしました。

毎日浄霊を受け始めて1週間もすると、あんなにひどかった腰痛が徐々に軽減し、手足のしびれや腰痛も自然と消えてしまいました。私は、“あんなに手を尽くしても何の効果も現れなかったのに、浄霊って素晴らしい”と、効果を信賴し、薬とその他の治療を一切やめました。

浄霊を継続して受けていると体調はめきめきとよくなり、病院に行く以外は家でじっとしていた私が、明るい表情で積極的に外出する様子を見て、家族や近所の方からは、驚きの声が上がっていました。ふと気づくと、病気に対する不安もなくなっており、私は、長年の重荷から解放された喜びに包まれました。…以下省略

(A氏・79歳・女性、『光明』201A、2003年)

また、以下の体験談からは、「病－近代医療－浄霊－回復」といった「語りの形式」を抽出できる。

体がほてるようになり“更年期障害が始まったかな”と感じ始めたのは、一昨年11月のことです。

食欲が落ち、1ヶ月で5kgもやせてしまいました。正月を過ぎても、Tシャツ1枚で過ごすほど体はほてり、のどのかわきや脱力感がありました。脱水

症状も始まり、3ヶ月で12kgもやせてしまった私の姿を見て、夫が検査を受けることを勧めてくれましたが、私は結果が怖くて行けませんでした。食物がのどに詰まるようになると、“喉頭ガンに違いない”と思い、絶望感に打ちひしがれました。

3月、思い切って検査を受けると、甲状腺ホルモンの数値が平常の10倍もあることが分かり、「バセドウ病」との診断を受けました。状態は悪く、副作用の強い薬の使用は避けられないとのこと。私はショックで目の前が真っ暗になりました。

早速その夜、夫とともに浄霊センターへと向かい、浄霊ボランティアの方に相談しました。すると翌日から、大勢の方が、毎日わが家まで浄霊を取り次ぎに来てくださり、遠方の方は想念浄霊(祈りの浄霊)を送ってくださいました。夫も「俺は仕事を後回しにしてでも、おまえのために浄霊を取り次ぐよ。一緒に頑張ろう」と言ってくれ、私はどんなに心強く、勇気付けられたことでしょう。浄霊を受けると、あれほどの不安と緊張感が次第に薄れていくようでした。

診断を受けて以来、薬の服用は一切していなかったのですが、1週間後、再度の検査を受けると、ホルモンの量が平常の5倍にまで減っていることが分かりました。不思議そうな顔の医師を見た時、私は“浄霊できっとよくなる”と確信し、その後、受けるだけでなく、多くの方に取り次ぎ、どんなに小さなことでも感謝の気持ちで受け止めるよう心がけました。浄霊を徹底して受け始めてから1ヶ月半後の検査の結果、ホルモンの数値が正常に戻っていたのです。医師も、「こんなに短期間で回復した患者さんは初めてです」と、驚きを隠せないようでした。

私はその瞬間、夫や今まで浄霊を取り次いでくださった皆さんの顔を思い出し、言葉にならない感激と感謝でいっぱいになりました。そして、人様の幸せを心から願うことが人生で一番尊く、素晴らしいことだと実感したので



す。…以下省略

(B氏・52歳・女性、『光明』201A、2003年)

このような「語りの形式」の抽出を170話の体験談に対して行なうと、以下のよう分類が可能である(表1、表2)。

表1をみると、上記例で示したような「身体的な病」が多いことがわかる。表2をみると、近代医療では「回復」しなかった「病」が、浄霊によって「回復」したという「語りの形式」が多いことがわかる。尚、「その他」以外の「語りの形式」に出てくる浄霊は、世界救世教における治病儀礼である。これは神霊的放射能を照射することにより、身体の毒を排出するもので、この浄霊を行なうためには、「お光」(ペンダント)をもっていなければならないといわれる。この「お光」をとおして教祖・岡田茂吉の力が信者に伝達され、神霊的放射能が照射されると考

表1 体験談にみる語りの中心

語りの中心	人	%
身体的な病	125	73.5%
精神的な病	29	17.1%
信仰	16	9.4%
総計	170	100.0%

表2 体験談にみる語りの形式

語りの形式	人	%
病-近代医療-回復せず-浄霊-回復	82	48.2%
病-近代医療-浄霊-回復	58	34.1%
病-浄霊-回復	13	7.6%
その他	17	10.0%
総計	170	100.0%

えられている。つまり、浄霊は、神や教祖の力であり、「超越的な力」といえる。この超越的な力をもって、「病」が「回復」したと語られていることがわかる。

このような「語りの形式」であるが、以下より、ヨガと呼吸法といった代替療法を実践している者の語りを「病」や「病気治し」に関連する事項に着目し、その特徴を見出したい。

### 3. 「病」からみる代替療法

上述のように新宗教における「病気治し」は「超越的な力」による「回復」であった。では代替療法ではどうだろうか。次に代替療法をみてみよう。社会学において代替療法を研究対象としている平野直子は、「通常医療以外の病気治療や健康に関する身体実践」(平野 2016: 122) と定義している。ここからわかることは、代替療法が近代医療=現在われわれが国家の保健制度にもとづいて受診している医療とは異なる方法で、心身に対してアプローチする方法であるということである。尚、代替療法は、代替医療、補完代替医療(療法)、統合医療、伝統医療、オルタナティブ・メディシンなど、呼ばれ方が複数あり、国家資格など、国の制度に組み込まれている漢方、はり、きゅうなども含まれる場合もある<sup>4)</sup>。そのため本稿においては、あくまでも上述したように、「国家の保健制度にもとづいて受診している医療とは異なる方法」といった広い意味に設定した上で使用していくこととする。

それでは、以下より2011年と2012年に行なったヨガ実践者と呼吸法実践者へのインタビューにもとづいて、「語りの形式」をみてみたい。尚、各会話にある下線は、その会話の中で重要と判断した箇所である。また、新宗教信者の「語りの形式」と比較するため、代替療法実践者のインタビューに関しては全文を掲載するのではなく、「きっかけ」「近代医療との関係性」「続けた結果」の3点に着目して、抽出したい。

### 3.1 ヨガ実践者における「語りの形式」

はじめにヨガ実践者の語りをみてみよう<sup>5)</sup>。

#### 【ヨガをはじめたきっかけについて】

若い時、運動したりしていたんですけど、割と虚弱で、身体が病氣とか怪我とか多かったんですね、ずっと。で、社会人になって、運動とかしなくなって、色んなストレスとか、生活のリズムがこう忙しくて、睡眠不足とか、そういう色んな事がたまって体調を大きく崩す時期があって、崩した時にまあ仕事もちょっとできなくなるくらい、悪かったので、そこでやっぱりその何となく治すだけではなくって、根本的から体質を変えたいというか、体も鍛えたいし、精神も鍛えたいみたいな事で。で、ヨガを始めた感じですね。

ヨガをはじめたきっかけをみると、「虚弱」や「病氣や怪我が多い」、「体調を崩す」といった「身体的な病」の語りが多い。これらをきっかけとして、自身の「根本的から体質を変えたい」「体も鍛えたいし、精神も鍛えたい」といった願望にもとづいて、ヨガをはじめている。

#### 【近代医療との関係性】

いろいろな薬に頼る生活みたいな、まあ悪くなったら薬飲んで直せば良くなるみたいなものから、そうならないように気をつける生活に変わったという感じかな。

近代医療に対しては、肯定とも否定ともとれないが、薬＝近代医療に頼らないように「気をつける生活」をしている。

【ヨガを続けた結果】

ヨガをはじめてからといって続けている今はヨガをやってすごく充実して、精神も強くなって良くなったと思っている。…ヨガを始めて最初に思ったことは、体が丈夫になった。それで足腰が強くなった。立ち仕事をしていて、歩くとすぐ足がむくむとか、家に帰ると脚がパンパンだとか、あとはその、疲れて座りたくなっちゃうとか。そういうのが減ってきたなあ。…その後ずっと何年も何年もずっとやっていく中で大きく思ったのは、風邪を引きにくくなった。あのね、若いときに風邪を引くとなると、本当に寝込んでしまうぐらいに具合が悪くなるまで、風邪をこじらせることが多かったんだけど、小さいときは喘息っぽかったし、今はまったくくないので。あとね、内臓がすごく弱くて、胃潰瘍とかも何回もやってて、入院したりもしたんだけど。神経性胃炎みたいな、胃がすぐに荒れちゃって。で、あんまひどくなると胃潰瘍みたいなものがあったけど、そういうのもまったくなくなって。胃薬とかももう10年以上飲んでないかな。

自分の体にすごく興味を持つようになって、たとえばすごく体力が落ちてきてるとか、…風邪を引きそうだとかね。そういうことに気が付けるようになってきたっていうのかな。そうじゃなかったころは、具合が悪くなってから初めて気づくみたいな。そうするとかなり手遅れじゃないけど、もう予防は出来ずにもう薬飲まないと、病院にいかないと治らないみたいな。そうなる前に気が付くようになって来たのがまあ、第一段階かな。…自分の体の変化に気づくのは、ヨガ始めてからかな。自然と気づく、かな。

ヨガを続けることによって、身体的・精神的に強くなった（≡「回復」）と考えている。同時に、「自分」で変化に気づくことができるようになった、としている。ここでは「自分」ということが強調されていることから、ヨガにおける「病

気治し」には、「自分／自己」という要素が強く影響を与えていること読み取れよう。

### 3.2 呼吸法実践者における「語りの形式」

前節では、ヨガ実践者の語りをみた。ここでは呼吸法実践者をみてみよう<sup>6)</sup>。

#### 【呼吸法をはじめたきっかけについて】

多分私が割と体が弱い訳ではないんですけど、割と不調を抱えやすいタイプの体質を持っていて、たとえば頭痛だったり肩こりだったり。あと小さいころから音楽を、ピアノをやっていたりすると手に、筋肉を使ったりするとまたそれで局所疲労を起こしたり。そういう疲労を残しやすい体だったので、それを感じない状態っていうのを、割と感じる時が少ないんですね。…(体調が悪いときは)基本的に休むっていうのが一番多いですけども、どちらかというところ(体の状態が良くない時を改善する方法)を探したくて色々ヨガだとかする中で呼吸法と出会ったんですけど。…今やっているのは出来るだけ体を動かすことと休むことと。あと最近は整体みたいな、整体とか針とか色々試してます。

不健康な状態が私は非常に続きやすいっていうところを改善する方法はないかと、まあいろいろ探っていくのは実はもう結構小学校中学校くらいからずーっとやっていて、でまあ4年前に、あ、まあ結構前にヨガというものには出会っていて、知識として、ただそれをアクションを初めて起こしたのが4年前だったんですけども、そこでたまたま呼吸法に出会ったとうことになります。

対象者は、呼吸法をはじめめる前、ヨガや「不健康な状態」を改善する方法を模

索していたという。この「模索」の中で呼吸法に出会う。尚、この模索のきっかけは、頭痛や肩こり、疲労といった「身体的な病」であると語っている。

#### 【近代医療との関係性】

呼吸法を学ぶ前、今もあるんですけど頭痛持ちで…、…たぶん365日中300日は頭痛持っているようなタイプだったので。…あと病院に行ってもまあ、処方されるものもだいたい想像がつくので、それは根本的な解決にはならないなあというタイプの頭痛を持ってましたね。

目の疲れからくる頭痛だと自分では思っていて、なのでまあ単純に首をあつためてみるとか。あと眼鏡を一個から二個に増やして見て、その場所に合わせる眼鏡を変えるとか。そういうホントにそういう西洋的な、物理的なアプローチも結構やったんですね。あとはジムに行ってた時もあったそのときにもうちょっと筋肉鍛えようってやってたこともありました。病院もあつたんですけど、なんか、結局鎮痛剤になったので、まあホントに辛くて鎮痛剤って効果あると思うんですけど、あの痛み、だいたい鎮痛剤ってホントは良い使い方はとってその取れた習慣をつければ、痛みってなくなっていく方向の人が多と思うんですけど、頭痛の場合は完全に生活習慣だとまた鎮痛剤がなければ、飲まなきゃ、痛い状態にすぐ戻ると思ったので、なので病院には出来るだけ頼らないでおこうとは思いましたね。

近代医療＝病院での治療に関しては、「根本的な解決にはならない」「病院には出来るだけ頼らないでおこう」といった否定的なニュアンスをもつ語りがみられる。これは、対象者の「痛み」に対して鎮痛剤を用いた効果はあるものの、それが根本的な「痛み」の回復にはつながらないと考えているためである。つまり近代医療では「快復」しないとといった認識にたっていることがわかる。

【呼吸法を続けた結果】

ヨガだとか呼吸法だとかそういう東洋的なものに自分がこうシフトしていている理由としては、やはり自分で自分のことがちゃんとわかるようになってきた感覚があるんですね。その西洋的なただ筋トレをするというよりは自分の状態をちゃんと見ながらやっていって手ごたえを非常に感じることができる。

私身長ちっちゃいんですけど、椅子とか机とかサイズが合わなかったり無理するっていうのは日常あるんですけど、呼吸法を学んだことで、その日常的なものが減ったということは確かにあります。なので、そこは少し不安が減ったかなとは。あとこうすれば少し軽くなるんだなあということが自分で分かってきたので、そこに対してはすごく不安は減りましたねえ。

呼吸法はなかなかこう言葉で言うとあやしくなる。私もそういう先入観がすごく強いので。でも当日来ていたインストラクターの方とか本当に、ヨガのいろんな所で教えてらっしゃる方なので、…ただ結構ヨガスタジオが身体的なアプローチが強いヨガスタジオの先生が多いせいか、結構呼吸法は気付きがいろいろ多くて、お互いに共有するところが多かったので、楽しかったですね。

では、呼吸法を続けた結果、どうなったのであろうか。呼吸法実践者は、呼吸法などの代替療法には「先入観」として「あやしき」があると考えている。しかし、西洋的なものではわからない（と考えている）自分の状態（自己）を把握できると考えている。つまり、ここから読み取れるのは、呼吸法における「病氣治し」にも「自分／自己」という重要な要素があることがわかる。

以上、ヨガ実践者と呼吸法実践者の語りから「語りの形式」を捉え、その特徴

を見出した。次章では、新宗教の信者と代替療法の実践者の「語りの形式」を比較することをとおして、その類似点と相違点を明らかにしたい。

#### 4. 新宗教と代替療法の類似と相違

##### ——「病気治し」としての新宗教と代替療法

本章では、上述した新宗教(あるいは新宗教信者)における「病」や「病気治し」と代替療法(あるいは代替療法実践者)におけるそれらとを比較することをとおして、類似点と相違点を見出したい。ただし、ここで取り上げたものは事例が少ないため、新宗教と代替療法を代表しているとはいいがたい。そのため、ここで提示する類似と相違は、「作業仮説」的要素が強いといえる。

それでは、はじめに「きっかけ」をみてみよう。代替療法における「きっかけ」は、その代替療法をはじめめるきっかけであるが、新宗教の場合、「病気治し」をはじめたきっかけである。この点の差異は多少あるだろうが、両者ともに「病気治しのきっかけ」として捉えていくことにする。というのも、代替療法実践者の語りをみてもわかるように、それぞれの代替療法をはじめめるきっかけ＝体調不良を治したい＝病気治しと解釈可能だからである。この点をくみした上でみると、新宗教信者の「きっかけ」は、表1と表2をみてもわかるように、病、特に「身体的な病」が中心であることは明らかである。

では代替療法実践者はどうであろうか。まずはヨガにおいてである。ヨガ実践者の語りをみると「きっかけ」として語られているのは、「割と虚弱」「病気とか怪我とか多かった」「体調を大きく崩す時期」「根本的から体質を変えたい」「体も鍛えたい」「精神も鍛えたい」といったように精神的なこともあるが、中心的なのは「病」とは言い切れないが「身体的なこと」である。次に呼吸法である。呼吸法実践者では、「割と不調を抱えやすいタイプの体質」「頭痛だったり肩こり」「局所疲労」「疲労を残しやすい体」「ヨガだとかする中で呼吸法と出会った」「整体とか



針とか色々試してます」「不健康な状態が私は非常に続きやすいっていうところを改善する方法はないか」といったような「身体的な病」や「身体的な病」に起因する改善方法の模索の中で「きっかけ」が語られている。つまり、ヨガ実践者においても呼吸法実践者においても、同様に「身体的な病」が「きっかけ」として語られているといえる。ここから、新宗教信者においても代替療法実践者においても「身体的な病」をきっかけとして「病氣治し」を実践しはじめたということがわかる。ただし、新宗教の「きっかけ」に関しては、体験談ではあるが、量的にも把握できているため「身体的な病」が多いということができただろうが、代替療法実践者に関しては、それぞれ1名のため、「恣意性」を拭い去ることができないことは付言しておく。これに関しては次の「近代医療との関係性」や「病氣治しを続けた結果」も同様である。

次に「近代医療との関係性」をみてみよう。新宗教信者における「近代医療との関係性」は、A氏の「痛みが出ると、すぐに薬を飲みましたが、効果は一時的で、その後も痛みは増すばかり」といった記述が特徴的といえる。これは病気になり病院に通ったが、「効果は一時的で」、「痛みは増すばかり」、つまり近代医療に対して「否定的」であり、ネガティブ（消極的）な記述といえる。では代替療法実践者はどうであろうか。ヨガ実践者においては、「薬に頼る生活」「悪くなったら薬飲んで直せば良い」といった生活から「そうならないように気をつける生活に変わった」と語られているように、近代医療に対して新宗教信者のように「否定」と強く断定できる要素は見出せないが、近代医療への「依存」を断ち切るといった近代医療に対するネガティブなニュアンスが含まれているようにみえる。また呼吸法においても同様に、「根本的な解決にはならない」「病院には出来るだけ頼らないでおこう」といったように、近代医療に対してはネガティブさがみられる。これらから考えると、新宗教信者であっても代替療法実践者であっても共通に近代医療に対してはネガティブな印象（関係性）をもっているといえよう。

最後に「病氣治しを続けた結果」をみてみたい。新宗教信者は「浄霊を受ける」

ことによって、A氏の場合は「ひどかった腰痛が徐々に軽減し、手足のしびれや腰痛も自然と消えてしまいました」「体調はめきめきとよくなり」、B氏の場合は、「浄霊を受けると、あれほどの不安と緊張感が次第に薄れていく」「ホルモンの数値が正常に戻っていた」といったことからわかるように、浄霊といった世界救世教の宗教的実践(=超越的な力であり自己以外の力=他力的)によって「回復」したと捉えることができる記述がみられる。では代替医療実践者はどうであろうか。ヨガ実践者においては、「すごく充実して、精神も強くなって良くなった」「体が丈夫になった」「足腰が強くなった」「風邪を引きにくくなった」「小さいときは喘息っばかったし、今はまったくない」などのように、「回復」と捉えられる語りがみられた。さらにこの「回復」によって「自分の体にすごく興味を持つ」「自分の体の変化に気づく」「自然と気づく」といった「自分/自己」が強調されていることもおさえておく必要がある。この「自分/自己」は呼吸法実践者においても同様である。呼吸法実践者の語りをみてもわかるように「病気治しを続けた結果」は「回復」とみることができる。そして、この「回復」の結果、「自分で自分のことがちゃんとわかるようになってきた感覚」「自分の状態をちゃんと見ながらやっていって手ごたえを非常に感じるができる」「こうすれば少し軽くなるんだなあということが自分で分かってきた」「気付きがいろいろ多く」と、「自分/自己」が強調されている。上記から、病気治しを続けた結果、新宗教においても代替療法においても同様に「回復」と捉えられる記述や語りがみられる。しかし、違いとしては新宗教信者においては浄霊という超越的な力であり自己以外の力が作用しているが、代替療法では「自分/自己」が強調されている。つまり、代替療法実践者は代替療法の指導は受けるが、「回復」するのは、自分の力と考えているといえよう。尚、上記、共通性と相違点についてまとめたものが表3である。

表3 「語りの形式」の比較からみる新宗教信者と代替療法実践者の類似と相違

	新宗教	ヨガ	呼吸法
きっかけ	身体的な病	身体的な病	身体的な病
近代医療との関係性	ネガティブ	非依存 (≠ネガティブ)	非依存 (≠ネガティブ)
続けた結果	回復(超越)	回復(自己)	回復(自己)

### おわりに——分析の整理と今後の課題

以上、新宗教信者と代替療法実践者の語りを通して、「病」や「病氣治し」の比較を「きっかけ」「近代医療との関係性」「続けた結果」に着目して行なった。その結果、語りの形式としては、「きっかけ」としての「身体的な病」、「近代医療との関係性」ではネガティブな関係性、「続けた結果」では、明言されていないものもあるが「回復」と捉えられるような状況を見出すことができた。これは類似点として指摘することができよう。

相違点としてあげられるのは、「続けた結果」の中に見出すことができる志向性である。新宗教信者においては、超越的な何者か、ここでは浄霊といった世界救世教における宗教的実践をとおして「回復」している／すると捉えることができる。つまり、世界救世教の教祖・岡田茂吉の力やその背後にある神の力といった「他力的」「超越的」な要素を見出すことができる。他方、代替療法実践者は、語りをもてわかるように「自分／自己」が強調されており、超越的な何者かや誰か他者が「治す」というよりも代替療法を実践した結果、自分で「治す」(あるいは「治る」)と考えているようにみえよう。つまり、「病」や「病氣治し」から新宗教信者と代替療法実践者をみると、新宗教信者の場合は、超越的・他力的治病観が、代替療法実践者は自力的治病観が析出できる。上記、類似点と相違点を図示したものが図2である。

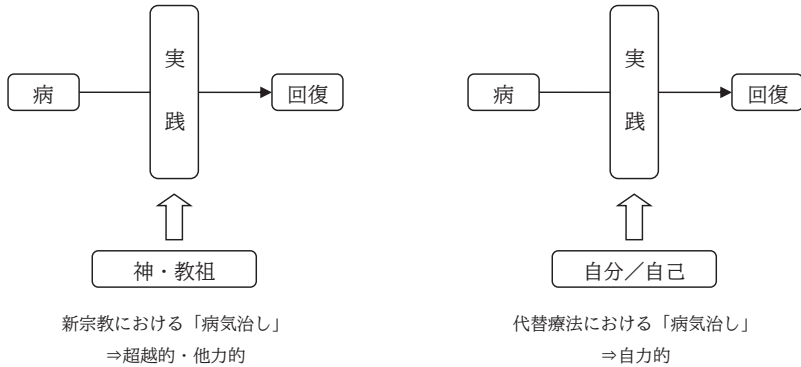


図2 「語りの形式」からみる新宗教と代替療法における「病気治し」

ただし繰り返しになるが、ここで取り上げた代替療法は2種類であり、なおかつ、実践者はそれぞれ1名であることを考慮すると、あくまでもここでの結論は「作業仮説的」である点は否めない。また、新宗教についても世界救世教しか取り上げていない点を考えると、「病気治し」を宗教的实践として扱っている他の教団も対象化する必要がある。そのため、この2点は今後の課題として、ここで明らかとなった超越的・他力的治病観と自力的治病観について、さらなる精緻化を目指したい。

注

- 1) 世界救世教の機関紙である『光明』は、信者が非信者の家庭にポスティングを通して配布しているいわば布教目的の「新聞」である。そこに掲載されているのは、医療、子育て、自然食などの現代的な情報、信者の体験談、有識者へのインタビューなどである。
- 2) 『光明』に掲載されている170話の体験談分析の詳細は、すでに拙稿(武井 2009)において提示しているため、ここでは省略し、本稿において必要となる情報のみ提示することにとどめたい。
- 3) 尚、事例の下線は筆者が引いたものであり、この下線を読み取ることで「語りの形

式」を析出することが可能であると考え。

- 4) 日本では2012～13年にかけて厚生労働省において「[統合医療]のあり方に関する検討会」が開催された。そこでの「これまでの議論の整理」によれば、「統合医療」とは、「近代西洋医学と相補・代替療法や伝統医学等とを組み合わせる療法」のことである(厚生労働省2013)。また、日本以外をみるとバリー・R・キャッシュレスは、代替療法に関しては、主流医学(日本においては病院で受診できる医療)以外に代替療法や補完医療があるとし、アメリカにおいては代替療法、ヨーロッパにおいては補完療法と呼ばれているとしている(Barrie 1998=2000: iii-iv)。尚、バリーはここで鍼、アーユルヴェーダ、中国伝統医学、ホメオパシー、アメリカ先住民の治療法、マクロビオティック、瞑想、カイロプラクティック、リフレクソロジー、太極拳、ヨガ、アロマセラピー、信仰療法など54の療法について解説を加えている(Barrie 1998=2000)。
- 5) 2011年10月20日に立正大学文学部社会科学開設の「社会調査実習」の授業でインタビューを行なった。性別は女性である。
- 6) 2012年11月3日に立正大学文学部社会科学開設の「社会調査実習」の授業でインタビューを行なった。性別は女性である。

## 参考文献

- Barrie R. Cassileth, 1998, *THE ALTERNATIVE MEDICINE HANDBOOK: The Complete Reference Guide to Alternative and Complementary Therapies*, New York: W W Norton & Co Inc. (浅田仁子・長谷川淳史訳, 2000, 『代替医療ガイドブック』春秋社.)
- 平野直子, 2016, 「[オルタナティブな食]の言説と身体」, 『宗教研究』386, 107-130.
- 伊藤雅之, 2006, 「現代ヨーガとスピリチュアリティ」『アジア遊学』84, 154-165.
- 小堀哲郎, 1999, 「岡田虎二郎と岡田式静座法」田邊信太郎・島蘭進・弓山達也編『癒しを生きた人々——近代知のオルタナティブ』専修大学出版局, 47-86.
- 近藤喬一・北西憲二, 1999, 「森田療法と癒し」田邊信太郎・島蘭進・弓山達也編『癒しを生きた人々——近代知のオルタナティブ』専修大学出版局, 129-164.
- 厚生労働省, 2013, 「これまでの議論の整理について 資料」(<https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/2r9852000002vsub-att/2r9852000002vsy2.pdf> 2022年8月22日アクセス)
- 前川理子, 1999, 「野口晴哉と「全生」思想」田邊信太郎・島蘭進・弓山達也編『癒しを生きた人々——近代知のオルタナティブ』専修大学出版局, 217-263.
- 世界救世教いづのめ教団, 2003-2007, 『光明』201A-256B.

- 島菌進, 1999, 「マクロビオティックの世界観」田邊信太郎・島菌進・弓山達也編『癒しを生きた人々—近代知のオルタナティブ』専修大学出版局, 165-215.
- 島菌進, 2003, 『〈癒す知〉の系譜——科学と宗教のはざま』吉川弘文館.
- 杉山幸子, 2004, 『新宗教とアイデンティティ——回心と癒しの宗教心理学』新曜社.
- 武井順介, 2009, 「新宗教教団における体験談の諸相——世界救世教を事例として」『立正大学社会学論叢』8, 1-14.
- 田邊信太郎・島菌進・弓山達也編著, 1999, 『癒しを生きた人々——近代知のオルタナティブ』ハーベスト社.

(2023年1月11日受理, 2023年1月18日採択)